

**学校の教育目標**  
**明るい子 やりぬく子 の育成**  
～やさしく(心の明) かしこく(学びの明) たくましく(体)～

**【学校課題】**  
統合校がアクティブ・ラーニングを中核にした先進的なカリキュラムの実践校となることを踏まえる。

**【児童の実態】**  
素直で優しく、何事にも真面目に取り組むことができる子が多い反面、仲間への固定的な見方があり、新たなものを創り出そうとする逞しさに欠ける。  
学習面では、既習事項の活用や筋道立てた考えによって課題解決を図る自学自習の態度を育て、話し合い活動を充実させることで表現力を高める授業の工夫改善を行ってきたが、まだ十分とはいえない。

**【今日的な課題】**  
知識の伝達だけに偏らず、基礎的な知識・技能を習得するとともに、それらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていけるようにすることが重要である。(中教審の文科相諮問文)

**【国語科の目標】**  
国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め、国語を尊重する態度を育てる。  
そのためには、単元全体を通して一貫した言語活動を位置付けることが不可欠である。

**【研究主題】**  
**主体的・協働的に学び、語り合いながら課題を解決する児童の育成**  
**～ 単元を貫く言語活動を位置付けた国語科授業の創造 ～**

**【願う児童の姿】**

仲間と語り合いながら課題を解決して自ら生活を切り拓いていく児童を理想像とする。授業場面では、単元や単位時間の課題に対する自分の考えをもって仲間と考えを伝え合いながら、単元や単位時間の課題を解決したり、よりよい考えを創り出したりする児童の姿を願っている。

**【研究仮説】**

国語科「話すこと・聞くこと」「書くこと」の授業に、単元を貫く言語活動として成果を表出する活動を位置付け、最適解を求めるための必然のある交流活動を仕組むようにすれば、児童は主体的・協働的に学び、言語能力を身につけ、語り合う力を高めることができる。

<b>【研究内容 1】</b>	<b>【研究内容 2】</b>
児童の主体的な思いを重視した単元構成や単元のねらいに応じた単元を貫く言語活動の工夫	課題を協働的に解決することに向けた必然性のある交流活動の工夫
<ul style="list-style-type: none"><li>・児童が「知りたい!」「やりたい!」「伝えたい!」と思う課題解決の過程をつくる</li><li>・課題解決の過程となる言語活動を適切に選定する</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・単元を貫く言語活動を遂行することと密接に関連付けた必然性のある交流の時間や場面を位置付ける</li></ul>

# 平成28年度 岐阜市立徹明小学校 研究構想

## 1 研究主題

主体的・協働的に学び、語り合いながら課題を解決する児童の育成  
～単元を貫く言語活動を位置付けた国語科授業の創造～

## 2 主題設定の理由

平成29年4月に開校する統合校が、岐阜大学教職大学院の研究開発校（アクティブ・ラーニングを中核にした先進的なカリキュラムの実践校）となることを踏まえ、来年度の本校は「主体的・協働的な学び」を充実させるための主題研究を行うこととする。平成26年11月20日の中央教育審議会総会で取り上げられた文部科学大臣の諮問文には、新しい時代に必要となる資質・能力の育成に関し、「知識の伝達だけに偏らず、基礎的な知識・技能を習得するとともに、それらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていけるようにすることが重要である。」と指摘している。アクティブ・ラーニングは、こうした資質・能力を育むための学習指導の方法として提唱されている。課題解決のための主体的・協働的な学習を目指すことが重要になるのである。こうした学習によって、仲間と語り合いながら課題を解決し、自ら生活を切り拓いていく児童を育てていくことを理想像としてイメージしている。また、統合校へと繋げる1年限定の主題研究となることを考慮し、1～6年生（全学年）で国語科の主に「A 話すこと・聞くこと」や「B 書くこと」の授業改善に取り組むことが適当であると考えた。

現行の小学校学習指導要領では、国語科の目標を「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め、国語を尊重する態度を育てる。」と示している。各単元で付けたい国語の能力を児童が確実に身に付けるためには、児童の主体的な思考・判断が生かされる課題解決の過程となるよう、単元全体を通して一貫した言語活動を位置付けることが不可欠である。つまり、国語科でアクティブ・ラーニングを具体化することは、単元を貫く言語活動を位置付けた授業づくりを一層推進することに他ならないと考える。特に、協働性を育むためには、最適解を求めるような言語活動を考えなければならない。

そこで、研究主題を「主体的・協働的に学び、語り合いながら課題を解決する児童の育成」とし、副題に「単元を貫く言語活動を位置付けた国語科授業の創造」と設定することとした。

## 3 願う児童の姿

単元や単位時間の課題に対する自分の考えをもち、交流活動を通じて仲間と考えを伝え合いながら、単元や単位時間の課題を解決したり、よりよい考えを創り出したりする児童の姿が、本校の国語科授業で願う児童の姿である。

ここで言う「交流活動」とは、国語科の指導事項として位置付けられている「話すこと・聞くこと」の「話し合うこと」や「書くこと」の「交流」に留まらず、仲間と考えを伝え合う中で、自分たちの意志や判断によって、新たな価値を創り出すような必然のある関わりとなる活動を考えている。

## 4 研究仮説

国語科の授業に、単元を貫く言語活動として成果を表出する活動を位置付け、最適解を求めるための必然のある交流活動を仕組むようにすれば、児童は主体的・協働的に学び、言語能力を身につけ、語り合う力を高めることができる。

## 5 研究内容

- (1) 児童の主体的な思いを重視した単元構成や単元のねらいに応じた単元を貫く言語活動の工夫
  - ・ 児童が「知りたい!」「やりたい!」「伝えたい!」と思う課題解決の過程をつくる
  - ・ 課題解決の過程となる言語活動を適切に選定する
- (2) 課題を協働的に解決することに向けた必然性のある交流活動の工夫
  - ・ 単元を貫く言語活動を遂行することと密接に関連付けた必然性のある交流の時間や場面を位置付ける